

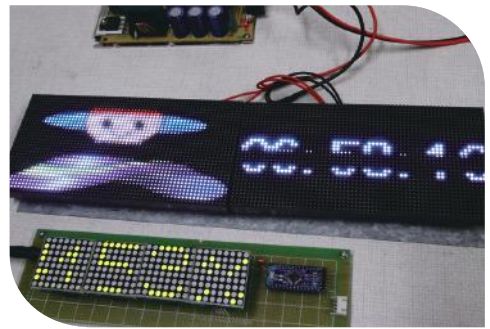


化学、物理学、生物学から情報（IT）、プログラミングまでと、センターで扱う範囲は広がっている。科学の原理を熟知して、広範な知識があつてはじめて、他のどこにもない展示品をつくりだせる。

いとう ひろお
伊藤 博夫 さん

1946年京都生まれ。子どもの頃からの工作好きで、ラジオを作ったり模型の船にモーターをつけたりして遊ぶ。府立桂高校から京都教育大を経て中学校教諭となる。4年後、27歳で開館6目になる京都市青少年科学センターへ配属。その後は通算40年近く、センターに勤務。木工からプラスチック、金属、電気機械、プログラミングまであらゆる分野を把握するジェネラリスト。定年退職後も、71歳の今に至るまで、科学センターの専門主事として工作物や展示に工夫をして、職員からも絶大な信頼を得ている。

展示品は
安全性を最優先で
制作しています！



「展示品はすべてオリジナル。ここ京都にしかありません」と語るのにはセンター勤務歴通算40年の「ミスター科学センター」こと、伊藤博夫さん。展示品の制作において伊藤さんほどの才能と情熱の持ち主はいない。「なぜ？」を考えることは科学だけでなく日常生活でも役立つ。子どもたちが手で触わり、不思議がり、繰り返し遊び、「考える場面をわ

り返す」ために、あらゆる工場の一角で必ず訪れるのは伏見区深草にある京都市青少年科学センター（以下センター）。展示品により、感覚的に科学の面白さを体験し、楽しみながら学べる施設として、1969年に開館した。以来、地域の子どもたちや一般にも公開されてにぎわう。

また、重視するのは安全性だ。年齢も体格もさまざまな子どもたちが利用するため、事故防止には特に気を配る。「科学者精神」の育成はセンターの目標であり、伊藤さんはその種を子どもたちに蒔き続けてきた。「もつと遊びたい。帰りたくない」の声が聞きたくて、伊藤さんは、今日も子どもの好奇心をそそる仕掛け作りに創意をちりばめる。

「発想の豊かさは群を抜いていて、みな相談役です」と話するのは同僚の倉澤大介さん。センターが誇る木材や金属、プラスチックの加工設備を駆使し、伊藤さんはオリジナルの展示品を生み出す。

世界唯一の展示品を通じ、
子どもの「科学者精神」を育む

緑の下のカモチ



私も出展します

三洋化成はこの夏、センターの特展「『はたらき』を化学する。」に協力し、同社の製品を活用したオリジナル展示品を出展します（7月14日～9月24日）。暮らしや産業の様々な分野を支える三洋化成をご体感ください。



三洋化成工業株式会社

京都市東山区一橋野本町11-1

最寄りバス停は「泉涌寺通」



「はたらき」を化学する。
"Performance" Through Chemistry